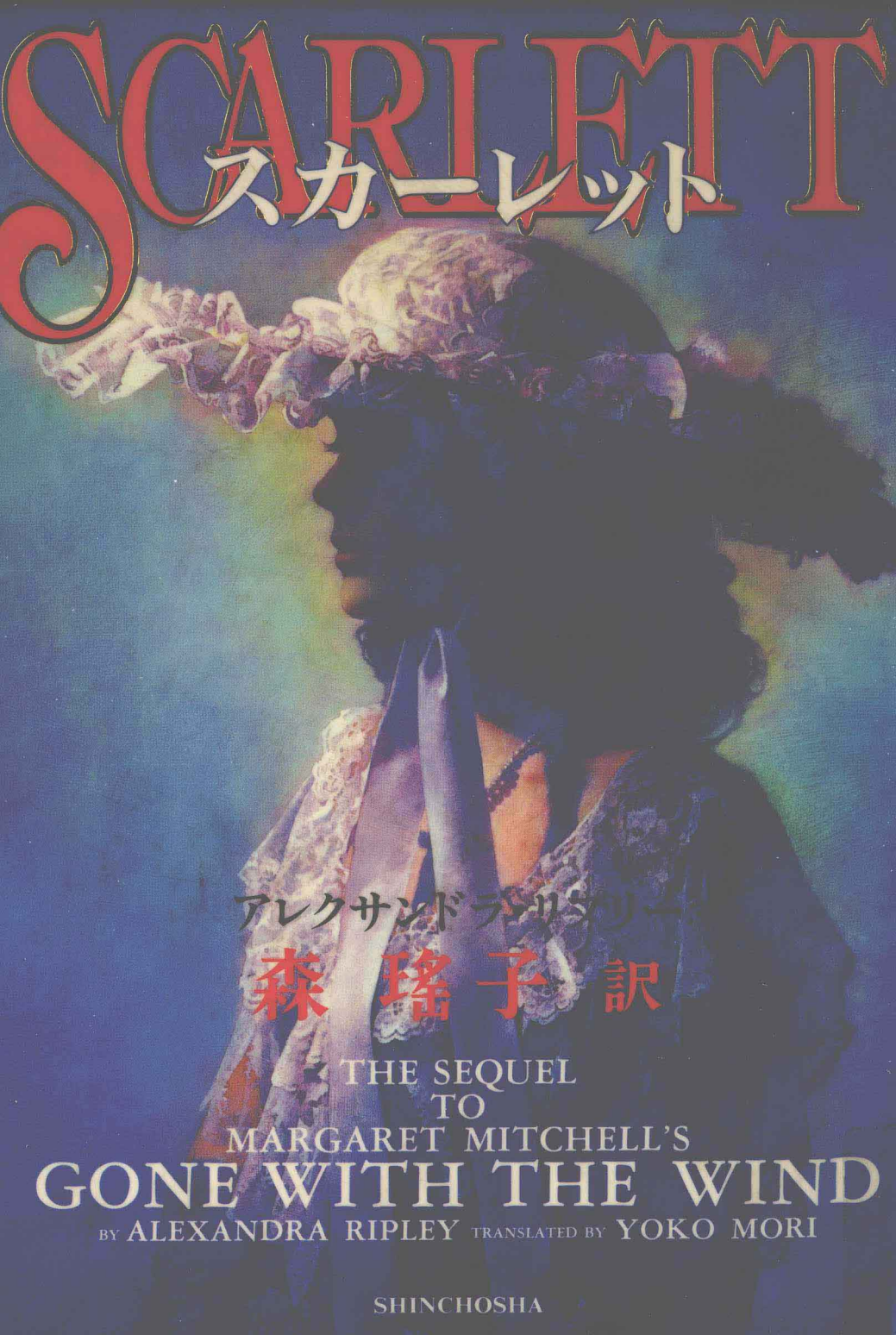


SCARLETT

A woman in a large, ornate hat and a blue dress, looking to the left. The background is a soft, hazy blue and green.

スカーレット

アレクサンドラ・リプリー
森 瑤 子 訳

THE SEQUEL
TO
MARGARET MITCHELL'S
GONE WITH THE WIND

BY ALEXANDRA RIPLEY TRANSLATED BY YOKO MORI

SHINCHOSHA

SCARLETT

THE SEQUEL
TO
MARGARET MITCHELL'S

GONE WITH
THE WIND

BY
ALEXANDRA RIPLEY

TRANSLATED BY
YOKO MORI

スカーレット

アレクサンドラ・リプリー

森 瑤 子 訳

新 潮 社

SCARLETT

THE SEQUEL
TO
MARGARET MITCHELL'S

GONE WITH THE WIND

BY
ALEXANDRA RIPLEY

TRANSLATED BY
YOKO MORI

© 1991 by Stephens Mitchell Trusts
Japanese edition first published in 1992 by
Shinchosha Company
Japanese translation rights arranged
with William Morris Agency, Inc. New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc. Tokyo.



スカーレット

アレクサンドラ・リプリー ^{もりようこ} 森 瑤子 訳

発行 1992.11.15

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 振替東京4-808

電話番号 営業部(03)3266-5111 編集部(03)3266-5411

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

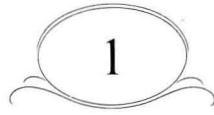
乱丁・落丁本はご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-525601-7 C0097

ス
カ
ー
レ
ッ
ト

第一部 闇の中で



あと少しの辛抱だわ、とスカレットは自分の胸にそう言い聞かせた。過去において数えきれないほどくりかえしてきた言葉——そうすればタラに帰れる——。

スカレットは今、義妹メラニー・ウィルクスの悲しい葬儀に集った弔問客から離れて、ただ一人、そぼ降る雨の中、昂然と立っていた。

他の人々は、喪服に包んだ軀を支え合うように、傘の下で一団となつて啜り泣きながら、灰色の雨と悲しみを共有していた。

スカレットは、誰とも傘を共にせず、悲しみもまた共にしなかった。雨混じりの刺すように冷い突風が、傘の中に吹きこんで白い首筋を濡らしたのにさえ、気づかなかつた。あまりにも深い喪失感が感覚を奪い神経を麻痺させていたのだ。

——泣くのは後にしよう。苦痛に耐えられるようになつたら存分に泣けばいい。そう自分に言い聞かせ、彼女は、苦痛も感情も思考も全てを遠ざけた。そして心の中で何度もくりかえしたのは、苦痛を癒し、その苦痛が癒されるまで自分を支えてくれるはずの、例のあの言葉だつた。

——あと少しの辛抱だわ。そうすればあたしはタラに帰れる——。

「……灰は灰に帰し、塵は塵に戻る……」

突然牧師の声が無感覚の殻を突き破り、スカレットの耳に届いた。違うわ！ 彼女は胸の中で叫んだ。メラニーじゃない。あれはメラニーの墓なんかじゃない。第一に大きすぎる。メラニーはほんとうに小柄だつた。骨だつて小鳥の骨みたいにか細かつた。そうよ、メラニーが死ぬわけがないじゃないか、あのメラニーが。

スカレットは思わず顔を背け、ぽっかりとあいた暗い墓穴の中の、質素な松材の棺を隙から閉めだそうとした。

柔らかな木棺の表面に刻まれたハンマーの跡が眼に焼きついて離れなかった。それは、メラニーの優しくて愛らしいハート型の顔の上に、蓋を閉めた時に釘を打ちこんで出来た跡だつた。スカレットは喉に熱い鏝を押しつけられたような気がした。

仮にメラニーがほんとうに死んでしまったとしよう。仮にそれは認めよう。たとえても、この雨の中で、雨の降りこむあんな穴蔵に柩を置いてはいけないのだ。彼女はひどい寒がり屋で、そして淋しがり屋だったではないか。冷い雨の中に置き去りにするなんてとてもできないし、耐えられない――。

墓の回りに集っている人たちを眺めると、いつそう熱い怒りが彼女の中にたぎった。みんなはそうするのが彼らの当然の権利でもあるかのように、いかにも悲しそうな様子をしている。だからと言ってその悲しみがあたしより深いなどと、どうして言えようか。他の人と同じようにお互いにすがりついて涙を見せないからと言って、あたしが他の人よりもメラニーを思っていないか、という証拠にはならない。人がどう思おうとかまいはしなかった。メラニーだけは知っている。それで十分ではないか。

いずれにしたって、あの連中には何もわかってはいないのだ。メリウェザー夫人にしたって、ミード夫妻もエルシング夫妻も、昔から自分たちの尺度でしか物が見られない人たちだった。妻に先立たれたアシュレと妹のインディアの回りに固まっているあの人たちを見るがいい。まるで濡れそぼった哀れな黒いカラスの群れといったところじゃないか。みんなで涙にかきくれたピティバット叔母を慰めている。泣き虫のピティバット叔母さん。ト

ーストが焦げたくらいの些細なことで取り乱したり、眼を泣きはらしたりするんだから。

誰もスカーレットのことなど、彼女の胸の内など、気にもしていないようだった。誰がこの数年来ずっとメラニーを支えて助けてきたか、メラニーがどんなにスカーレットを愛し必要としてきたか、そんなことを考えないばかりか、みんなはスカーレットがこの場にいないかのように、ふるまってさえいるのだ。誰一人、スカーレットに注意を払わなかった。アシュレさえも自分自身の悲しみに、どっぷりとくれていた。メラニーが死んだ直後の絶望的な混乱の二日間、いったい誰が彼の傍にいて、誰があの屋敷内での万事を取り仕きってきたか、彼自身が一番良く知っているはずなのに。それは他の人たちだとして、同じこと。ウィルクス家に残されたただ一人の女性として、しっかりと義姉の葬儀に当たらなければならぬ立場のインディアですら、ただおろおろと泣き事を並べたてたに過ぎなかった。

「お葬式のことだけど、スカーレット、わたしたち何をどうすればいいのかしら、弔問客用のお食事とか柩をつぐ人たちの手配とか……それと墓地はどこへ？ 墓碑銘はどうするの？ 新聞にも死亡広告を出さなければならぬんでしょ？」

そうした全てが支え切れないほどの重荷となって、スカーレットの両腕の中に押しこまれたのだ。そして彼ら

とはいえば、どこおりなく進む葬儀の間、思う存分悲しみにくれていればいいという訳だった。

そういうことならば、とスカーレットは頸を突き上げた。あたしは泣かない。あたしが肩に頭をもたせかける人もなく、たった一人で泣くところを見られると思つたら、大まちがいだ。彼女は喉の奥からこみ上げそうになる嗚咽を抑えるために、齒をしつかりと食いしばった。しかし、寒さと悲しみとで齒がカチカチと鳴り出すのは抑えられなかった。だが、あと少しでこの試練も終る。そうしたらあたしはタラへ帰れる。田園の静寂と、のどかな優しさの中へ。そして何もかも忘れるのだ。そう彼女は自分の胸に言い聞かせた。

スカーレット・オハラ・ハミルトン・ケネディ・バトラー。二十八歳。そぼ降る雨の中、メラニー・ウィルクスの葬儀が行なわれたアトラントのオークランド墓地はまた、スカーレット自身の無惨に引き裂かれた半生、その無数の悲しみの断片がちりばめられた場所でもあった。灰色の雨に濡れて縞模様を浮き出している花崗岩の黒っぽい尖塔は、永遠に消え去ってしまった世界、戦争以前の何不自由なく過したスカーレット・オハラの屈託のない青春時代への、陰鬱なる訣別の記念碑、輝かしい旗をなびかせて、しかし南部を決定的な破壊に陥れた誇りと勇気の象徴であるところの南部連合の記念碑だった。

それはまた、大きくふくらんだスカートをもち舞踏服をいくつも並べて、今夜はどれを着ようかしらというのと以外に悩みなど何もなかった娘時代に、スカーレットにワルツを踊って欲しいと頼み、キスの許しを乞うたかつての幼馴染みの勇者たちの記念碑でもあった。そしてそれは同時に、メラニーの兄であり、スカーレットが十六歳の時に結婚した最初の夫チャールズ・ハミルトンの墓でもあり、今メラニーのために集って雨に打たれている会葬者全ての息子たち、兄弟、夫、父親たち——見知らぬ戦場に散ったそれぞれ愛する身内のための、悲しい共同墓地なのでもあった。

その他にもまだあった。スカーレットの二番目の夫フランク・ケネディの墓。それからとても小さな、あまりにも小さな墓——「ユージェニー・ヴィクトリア・バトラー」——レット・バトラーとの間に生れた最愛の末娘ボニーが眠っている墓。

死者ばかりではなく、生者も彼女の回りにいた。アトラントの住民の半分もの人々が参列しているように思えた。群衆は教会に入りきれず雨の中に満ち溢れていたし、今は、メラニー・ウィルクスの遺骸を納めるために掘り返された、ジョージア特有の赤い粘土の墓穴の回りに、いびつに歪んだ大きな輪となつて頭を垂れていた。そうした人々からスカーレットは離れて立っていた。赤土の穴は、灰色の雨の中に口をあける痛々しくも色鮮やかな

傷口のように彼女の眼に映っていた。

会葬者の最前列には、メラニーに一番近い人たちが並んでいた。白い顔も黒い顔も、一様に涙の縞ができ、年老いた御者のピーター爺やは、デイルシーとクッキーと一緒に立ち、母を失って茫然自失しているメラニーの幼い息子のボオを取り囲むように守っていた。それは見る人々の胸を締めつけずにはおかなない悲劇的な黒い三角形を形づくっているのであった。

アトランタの古い年配者たちも、南北戦争のわずかな生き残りの子孫たちと共にそこにいた。ミード家、ホワイティング家、メリウエザー家、エルシング家の老夫婦たち。その娘たちと連れ合い。そして彼らの間でただ一人生き残った男子、エルシング夫妻の息子のヒューの顔も見えた。それからメラニーの叔母のピティパット・ハミルトンと、その兄のヘンリー・ハミルトン伯父。ピティパットとヘンリーの積年の反目も、今は最愛の姪を失った共通の悲しみのために、忘れられていた。インディア・ウィルクスもその年嵩とこかさのグループに身を潜めていた。ずっと若いにもかかわらず、そこにいる人たちと同じように、ひどく老けてみえる顔に、悲しみと罪の翳かげを浮べて、ウィルクス家のたった一人の生き残りである兄アシュレをみつめていた。

そのアシュレはスカーレットと同じように、ひとりで立っていた。彼はどうしようもなくひとりだった。帽子

もかぶらず、差しかけられた傘にも気づかず、濡れた衣服の冷さにも無頓着だった。彼は牧師の言葉が終ってしまったことが受け入れられなかった。メラニーを入れた細身の柩が、ぬかるんだ赤い墓穴に下ろされるのは、さらに耐え難く受け入れられなかった。

ああアシュレ。あたしはかつてあなたを愛しあなたを求め、しかもあなたを理解しなかった。かくも輝かしい金髪で、かくも優雅で超然とし、欧州のこと、書物のこと、音楽のこと、詩のこと、その他あたしがすこしも興味をもたないことばかりを口にしたアシュレ。しかもあんなにも彼にひきつけられたのは、なぜだったのだろうか？ 長身でほっそりとして青ざめたアシュレ。あの輝かしかつた淡い金髪はほとんどグレーに色褪せ、悲しみに打ちひしがれた青白い顔は、見開いているだけで何も見えない灰色の眼と同じくらい虚ろだ。彼は真つすぐな敬礼の姿勢で立っている。グレーの制服を着た将校としての歳月を彷彿ふたふたさせる姿で。にもかかわらず、事態の何であるかを把握せず、取り乱しもせず、身動きひとつせずただひとりぼっちで立ちつくしているのだった。次の瞬間には、バラバラに砕けてしまいそうな予感を漂わせて……。

おおアシュレ。スカーレットの引き裂かれた半生の象徴だったアシュレ。手を伸ばさずれば容易に自分のものにできた数々の幸せを、彼への愛の錯覚のために、ど

れだけ無視し手つかずにしてきたことか。

アシユレへの盲目の恋慕ゆえに、スカーレットは夫レット・バトラーに背を向け、レットの愛を理解することも受け取ることも拒んできた。もしかしたらそこに最初から存在したかもしれないレットに対する彼女自身の愛さえも、アシユレへの裏切りのように感じ、スカーレットは決して認めようとはしなかった。そしてレットは行つてしまった。それゆえに永久に去つてしまった。彼がこの嘆きの灰色の一团の中にいてくれさえしたら——レットが存在するというのが、この寒々とした雨のかわりに、黄金色の秋の花となつて、悲しみに頭を垂れた人々の上に暖かく降り注ぐであらうに——。

スカーレットは、彼女にとつてはこの世でただ一人の彼女の理解者でもあったレットを裏切り、メラニーの彼女に対する頑固なまでの忠誠と愛とを嘲笑した。そのメラニーが逝つてしまった。と同時に、アシユレに対するスカーレットの愛も逝つてしまった。ようやく今頃になつて——あまりにも遅きに失した今になつて、スカーレットは、彼女を支配していたのはアシユレに対する愛そのものではなく、彼を愛するという習慣だったことに、それがもうずっと前から愛自体に取つて代つていたことに、気づいたのであつた。

アシユレを愛していたのではなかったのだ。そして今後二度と彼を愛することはないだろう。それなのに今に

なつて、彼女が彼を欲しない今になつて、アシユレはスカーレットのものとなつたのだ。彼はメラニーが彼女に与えた遺産だつた。そしてスカーレットは臨終の床で、メラニーに、アシユレとボオの面倒をみると、約束してしまつたのだ。

アシユレ・ウィルクスは、スカーレットの人生の破滅の原因だつた。そして皮肉なことに、アシユレは、破滅した人生の中で彼女に残された唯一のものだつた。

依然としてスカーレットは人々から離れて一人で立っていた。彼女と他の人々との間を冷い鉛色の空間が隔てていた。かつてはその鉛色の空間をメラニーが充たし、スカーレットを孤独と追放から守つてくれていた。レットもまたそうだつた。そのレットが遅しく幅広い肩と愛情とで彼女をしつかりと守つてくれるべき傘の下は無人で、湿つた寒風が傘を突き上げるだけだつた。

彼女は風雨の中に高く顎を突き出し、その攻撃を受け止めた。何も感じない。彼女の五感の全ては、彼女の力の源であり希望の泉でもあるあの言葉に集約されていた。——あたしにはまだタラがある。あと少しでそこへ帰れる。

「あの女を見てご覧なさいよ」黒いヴェールの婦人の一人が、傘を共有している相手に囁いた。「冷淡を絵に描いたようじゃありませんか。お葬式を取りしきっている

間中、涙一滴こぼさなかったんです。何ごとともビジネス
 してわけね。いかにもスカーレットらしいやり方だね。
 人間らしい感情なんてまるきしないんですからね」

「人の噂ですけどね」と別の囁き声がそれに答えた。

「あの女、アシユレ・ウィルクスに対する感情だけは、
 たんとお持ちのようよ。あの二人ほんとうに――」

近くにいた人たちがシィッと二人を黙らせた。しかし
 黙らせた人々も胸の中では同じことを考えていた。他の
 誰も彼もがそうだった。たとえスカーレットの碧色の瞳
 に苦渋の色が浮んでゐるにしても、それは黒いヴェールの
 奥に隠されて見えなかったし、悲嘆にくれる心も孤独
 な思いも、厚い毛皮のコートに覆われていた。

その時、柩の上に落された土のドサリという音があた
 りの静寂の中に響き渡った。ぞつとするような虚ろで恐
 ろしい音だった。スカーレットは拳をきつく握りしめ、
 両手で耳を塞ぎたい衝動と闘った。メラニーの墓穴を閉
 じるおぞましい音を消すために、負けないくらいいの声で
 叫び出したかった。そうするかわりに、彼女は下唇を固
 く噛みしめて声がもれるのをふせいだ。悲鳴なんかあげ
 るものか。絶対にあげるものか。

その時悲愴な厳肅さを破ったのは、信じられないこと
 にアシユレであった。どんな場合にも決して取り乱すとい
 うことのなかったアシユレが「メラ……ニー……！」と叫
 び、またもう一度悲痛な声で叫んだ。「メラニー……！」

その声は拷問にかけられた魂の叫びそのものの、孤独と
 恐怖に満ち満ちた弱々しい悲鳴だった。彼はまるで失明
 したばかりの人のように両手を突きだして、ぬかるんだ
 深い穴に向つて、よろめき進んだ。メラニーは彼の夢の
 中でももっとも優しい夢、彼の勇気の源泉だった。彼の
 生きる望みの全てであつた小柄な静かな人を捜し求めて、
 両手が空を何度も何度も掴んだ。しかし掴めるものは、
 銀色の糸のような冷たい雨だけだった。

スカーレットは素早くミード博士を見た。インディア
 からヘンリー・ハミルトンに視線を移した。彼らは凍り
 ついたように動こうともしないで、ただ怯えたようにア
 シユレをみつめていた。どうして誰もアシユレを止めな
 いのだろうか。

「メラニー……！」

おお神さま、後生です。なぜ誰も飛び出して行つてア
 シユレを止めないのでしょうか？ 墓穴に滑り落ちて首の
 骨を折つてしまふじゃないか。それなのにみんなは、墓
 の縁をよろめき進むアシユレを、呆けたようにただ茫然
 とみつめていただけなのだ。

「アシユレ、止まって！」と叫ぶなり、スカーレットは
 駆け出していった。濡れた草に足を取られて、よろけたり
 滑ったりした。とつさに投げ捨てた傘が風に飛ばされて
 地面を転がり、ようやく山のような弔問花にぶつかつて
 止まるのがちらと見えた。スカーレットはアシユレの手

首を掴むと、危険な穴から彼を引き離そうとした。彼は無我夢中で彼女に逆った。

「やめて」アシユレの力と戦いながらスカーレットは叫んだ。「しつかりして。わからないの、アシユレ。メラニーはもう、今までみたいにあなたを助けてはくれないのよ。後生だから一生に一度くらい、男らしくふるまったらどうなの！」

彼女の厳しく冷い声は、悲嘆につぶれたアシユレの耳に届いた。彼の動作がびたりと止み、両腕はだらりと両脇に垂れた。彼は苦悩に満ちた唸り声をかすかに上げると、次の瞬間、スカーレットの腕の中に崩れ落ちた。その重みが支え切れず思わずよろめいた時、ミード博士とインディアがアシユレの両側から彼をまっすぐに助け起して、スカーレットから引き離した。

「あなたはもう立ち去るがいい、スカーレット」意外な言葉がミード博士の口を突いて出た。「もう十分だろうこれ以上ここには、あなたがダメージを与えられるようなものは、何ひとつ残ってはいない」

「でもあたしは——」と言いかけて、スカーレットは自分を凝視している周囲の強張った顔を見た。どの顔にも残忍な好奇の色が浮んでいた。屈辱を一瞬にして吞みこむと、彼女はくると向きを変え、無言のうちに雨の中を歩き出した。人々はいつせいに後退った。まるで彼女のスカートが汚いドロでも跳ねとばすのを避けるかのよう

うに、群衆は身を引いた。

スカーレットは、プライドが傷ついたことを彼らに氣どられまいと奥歯を噛みしめて進んだ。ましてや、彼女が彼女を痛めつけたり傷つけることができるのだということ、を、ちらとでも氣どられるわけにはいかなかった。そこで昂然と顎を上げ、雨が顔を打ち首筋に流れこむに任せた。墓地の門に着き人々の眼から見えなくなるまで痛いほど背筋をぴんと伸ばし、肩を怒らせて大股に歩いて行つた。

それから彼女は鉄柵に掴つて躰を支えた。怒りと疲労と絶望からくる眩暈で、立つていられないほど足元がふらついていた。

御者のイライアスが駆け寄ってきて、女主人のがつくりと垂れた頭の上に傘を差しかけた。スカーレットは最後の氣力をふりしぼって、彼女を助けようとして差し出された御者の手を無視すると、自力で馬車まで歩いた。やつとの思いでフラシ天張りの車内に入ると、席に崩れ落ちウールの膝掛けを引き寄せた。骨の髄まで冷え切っていたが、たつた今自分がアシユレに言つたことを思うと、さらに寒氣が彼女を襲つた。

あんなに大勢の人々の前で、しかもすでに十分に打ちのめされているアシユレを、いっただうしてあんなふうにあたしは辱めることができたのだろうか。メラニーの死の床で、彼女がしてきたのと同じ優しいやり方で彼

の面倒をみ、彼を守ってあげると固く約束してから、まだわずか二日しかたっていないというのに。かといって他にどんな方法があったのだろうか？ 墓に飛びこんで首を折るのを見殺しにするか止めるか二つに一つしかなかったではないか。

粘土についた深い轍おぼろに車輪がとられたのか、馬車が激しく左右に揺れ、スカーレットはもう少しで床に転げ落ちそうになった。その拍子に肘を窓枠にいやというほどぶつけてしまい、鋭い痛み息が止まるかと思われた。しかしそれは単に肉体的な痛みすぎなかった。そんなものはいくらだって我慢できる。彼女が耐え難いのは、待つこと。ぎりぎりまで引き延ばされ、喉のところでつまっている抑圧されたあの待つことの痛みの方だった。まだだ。まだここではだめ。一人ぼっちだもの。タラに着くまで我慢しなければ。タラにはマミーがいる。褐色の両腕を回してしっかりと抱きしめてくれるマミーがいる。子供の頃からそこに頭を押しつけさえすれば、不思議に痛みが癒されたマミーの大きな温かい胸。あたしはマミーの腕の中で泣くのだ。あの優しいとび色の大きな眼のメラニーはもういないのだと言って、泣いて泣いて苦痛を全て洗い流すのだ。秋の湖のような静けさをたたえたメラニーの眼は、もう二度と開いて、あたしに注がれることはない。それから泣きじゃくりながらマミーの胸に頭を憩やすみわせ、マミーのタラの大地のように温かい愛

情に、傷ついた心を憩やすみわせることができる。マミーはあたしをしっかりと抱きしめ、あたしを愛し、あたしがそれに耐えられるように痛みを半分引き取ってくれるだろう。

「急いでちょうだい、イライアス」とスカーレットは馬車の中から言った。「急いで」

「ぐずぐずしていないで、この濡れた服を脱ぐのを手伝うのよ、パンジー」とスカーレットは家に着くなり女中に命じた。「急いでつたら」まるで幽霊のように青ざめた顔のせいで、彼女の大きな眼はいつそう陰鬱に恐ろしいばかりに碧色にぎらぎらと輝いていた。若い黒人娘はその剣幕におどおどとまごつくばかりだった。「急いでと言ってるじゃないか。もしお前のせいで汽車に乗り遅れたら、皮がむけるほど鞭むちで打ってやるからね！」

そんなことはできるものか。パンジーはもうそんなことができないことを承知していた。奴隷制の時代は終わったのだ。スカーレット嬢さまはおらを所有していない、おらはいつだって好きな時にやめることができるのだ。けれどもスカーレットの眼が燃えるような絶望と激怒とでめらめらと輝くを見ると、パンジーは自分の新知識を疑わずにはいられなくなった。スカーレット嬢さまは未だにどんなことでもやってのけそうだった。

「黒のウールの服も入れてちょうだい、寒くなりそうだ

から」そう言つてスカーレットは開いている衣装ダンスの中を眺めた。ウールや絹、木綿など素材こそ異なれ、全て黒、黒、黒、黒。これだけ黒服があればこの先一生、喪に服しつづけたつて、お釣りが来るわ、とスカーレットは顔をしかめた。未だにボニーの喪中だし、今度はメラニーの喪に服さなければならぬ。だけどこのあたし自身を悼むためには、もっと悲しみに満ちたものの、黒よりもっと暗い色をみつければ——。しかし今は考えないようにしよう。自分のことを考えると気が狂いそうになる。タラに着いたら、あそこでならいろいろなことに耐えられる。スカーレットはわずかに落着を取り戻すと、怯えているパンジーを見て、声を少し和らげた。

「おまえも仕度しなさい、パンジー。外でイライアスが待っているわ。それから喪章をつけ忘れちゃだめじゃないの、ここは忌中の家なんだよ。さあ、びくびくするんじゃないよ。あたしがこれまで一度だつて、ほんとうに鞭でおまえを打つたことなど、ないじゃないの」

ファイブ・ポイントの合流地点は、泥沼からぬけだそうとする荷馬車や二輪車、四輪車などで、まるで戦場のようだった。泥濘に車輪をとられた御者たちの罵る声が充滿していた。彼らは雨を呪い、道路を呪い、邪魔をする他の馬たちや御者たちを呪って罵りあつた。叫び声や鞭打つ音や群衆の声などがそれに混じつていた。ファイブ・ポイント

ブ・ポイントはいつだつて人で一杯なのだ。彼らは急ぎ、議論をし、文句を言い、大声で笑い、生氣と氣力とエネルギーに沸き返っている。ファイブ・ポイントこそ、スカーレットが愛したアトランタそのものだった。

だが今日は違う。今日のファイブ・ポイントは彼女の邪魔をし、アトランタは彼女を引きとめて放そうとしなかった。なんとしてでも汽車に間に合わなければならなかった。乗り遅れたらあたしは死んでしまう。何がなんでもマミーのところへ、タラへ帰りつかなければ——さもないとあたしの胸は粉々につぶれてしまうだろう。

「イライアス！」とスカーレットは大声で言つた。「馬を死ぬまでぶつても構わない、道路にいる人間をみんな轢き散らしたつて構わない、是が非でも駅に行くのよ！」

スカーレットの馬はアトランタ中で一番強く、彼女の御者は誰よりも腕が良かった。そして彼女の馬車はお金で買ひ得る最上の代物だった。だとすれば何ものも彼女を凌駕することなどできるはずはなく、実際にできなかった。彼女は余裕すらもつて汽車に間に合つた。

蒸気が爆発する大きな音。スカーレットは息を止めて、車輪が回る最初の音に聞き耳をたてた。ゴットン、ついに汽車が動き出したのだ。続いてまたゴットン。そして車輪は一定の速度に達し客車が震える。とうとう帰途の人となつたのだ。これからは万事うまくいくだろう。タ

ラの光景が次々と眼に浮ぶ。紅葉した秋の木の葉の間に、日射しに輝く白いタラの屋敷が覗いている。開いた窓の中で陽気に膨らむ白いレースのカーテン。その下に広がるヤエクチナシの緑色の繁み。その中に、白い星のようにちりばめられた香りの良い小さな花たち。

しかし、駅を離れるやいなや、汽車の窓を激しい雨が打ち始め、滝のように流れ落ちた。たちまちスカーレットの胸は黒雲におおわれたが、すぐさま、それを追い払った。平気だわ。タラの家の居間には暖炉の火が赤々と温かく燃えているもの。薪の上に投げた松ぼっくりが陽気な音をたてて爆ぜるさまが見えるようだった。厚いカーテンはしっかりと閉じられ、雨と闇と冷い世間を締めだしてくれる。その懐かしい温かい部屋の中で、マミーにこれまでで起った恐ろしい出来事を全て話して聞かせよう。やがて慰められ癒されて、いろいろなことを考えられるようになるだろう。そして万事はうまく行くようになる……。

蒸気を放出するシュー、シューという鋭い音と、車輪の軋む音で、スカーレットははっと頭を上げた。もうジョーンズボロに着いたのだろうか？ ついうとうとしってしまったのに違いない。無理もないわ。二晩も眠っていないのだから。ブランドイでさえ昂った神経を鎮めてはくれなかった。あら違うわ。ここはラフ・アンド・レディ駅じゃないの。ジョーンズボロまではまだ一時間も

ある……。

少なくとも雨は止んでいた。青空さえわずかに覗いている。この分ではタラには太陽が降り注いでいるだろう。スカーレットは門から続く馬車道を思い浮べた。両側に立ち並ぶうっそうとした杉並木、その先に広々と横たわる緑の芝生。その向うの低い丘の上に建つ愛するあたしの家。

そこで彼女は深い溜息をついた。今では妹のスエレンがタラの屋敷の女主人だった。タラの泣き虫屋だったスエレンが女主人とは――。彼女ができることといえば泣きごとを並べるだけ。ずっと昔、みんながまだ子供だった頃からスエレンがやってきたことは、それだけだった。そして今では、二人の子供の――スエレンの子供の時とそっくりなメソメソした女の子たちの――母親なのだった。

タラにはスカーレット自身の子供たちもいる。ウェードとエラ。メラニーが死にかけているという知らせが届いた時、子守女のブリシーと一緒に二人の子供たちをタラへ送りこんであつたのだ。

あの子たちをメラニーの葬式に出席させるべきだったのかもしれない、とスカーレットは胸に小さな痛みを感じた。良心の呵責は別にしても、同伴しなかったことでアトランタ中の意地の悪い連中に、新たなゴシップ種を提供するはめになったことだけは、確かだった。言いた